

C-19 長崎県における婦人の被服調整に関する調査

長崎県立短大 ○前川 清子
鶴鳴短大 串山美津子

1. 繊維製品の技術の発達に伴って、近年急速に衣料が質、量共に豊富になり、被服の所持数についても変化が見られると考えられる。

生活様式の近代化により和服と洋服の割合にどのような違いが生じるか、また既製品の普及によって既製服、注文服、手製服の割合がどのようになっているか、以上の点を知るためにさきに昭和36,37,38,40年度に調査した。今回は昭和42年度に同様の調査をしたものについてまとめ、前年度との比較を試みた。

2. 期間 昭和42年7月から9月

調査対象および調査方法…長崎県下の20地区を選び、小、中、高校の生徒を通じて婦人に調査用紙を配布し記入して貰った。回収総数2203名であった。

3. 1)所持数について…洋服は一般に都市に多く農漁村は少ない。和服は地域的な差は顕著でない。

2)各服種について…ブラウスとスカートの所持数が多く総所持数の約50%を占める。和服は長着が総所持数の35%強を占める。

3)調整法について…洋服は既製服が全体の50%強を占め、手製が非常に少ない。和服は注文が多く、手製、既製の順である。

4)前年度との比較…洋服は所持数が著しく増加し、既製服が目立って増加している。和服の枚数は大差なく、既製服が増えている。